フレッシュ名曲コンサート(室内楽)　前田妃奈 ヴァイオリン・リサイタル

前田妃奈スペシャルインタビュー

聞き手：小室敬幸　（音楽ライター）

2020 年に第 18 回東京音楽コンクール弦楽部門第 1 位及び聴衆賞を受賞後、2022 年には第 16 回ヘンリク・ヴィエニアフスキ国際ヴァイオリンコンクールで優勝し、国際的に注目されている前田妃奈さんにお話を伺いました。

（2025 年 6 月 17 日　東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス）

―― 実は今年(2025 年)1 月に、前田さんの演奏を拝聴いたしました。
その東京フィルハーモニー交響楽団のニューイヤーコンサート(2025 年 1 月 3 日 Bunkamura オーチャードホール)のとき、前田さんはチャイコフスキーの協奏曲第 1 楽章を演奏されました。その演奏は本当に驚くほど個性的で（笑）、もちろん以前から非常に自由闊達（じゆうかったつ）なイメージを持っておりましたが、よりまさに前田さんならではのチャイコフスキーでした。チャイコフスキーを曲げているというわけではなく、ご自身の信念に基づいた音楽を奏でていらっしゃることに大変感動いたしました。なぜあのような自由な音楽を最近演奏されるようになったのか、何かきっかけがございましたでしょうか。

これ、というきっかけや意識して取り組んだことははっきり言えないのですが、どうやらどこかで吹っ切れたようです。特にチャイコフスキーの協奏曲はオーケストラと 10 回以上演奏していますし、ヴィエニアフスキの次に多く弾いていて、そのうちに吹

っ切れた部分もたくさんあります。加えて、2024 年は特に色々なことがあり、12 月頃に一気に「バーン」と吹っ切れた感じがします。周囲からも「人間的に明るくなった」と言われるようになりました。

―― 周囲の人がわかるくらい変化があったのですね。
そうですね、かなり変化があったと思います。

―― お話しいただける範囲で、どのような心境の変化があったかお聞かせいただけますか？
大学 2 年生だった 2022 年 10 月に、ヴィエニアフスキのコンクールがあって…。

―― 非常に大きな話題になってニュースでも大きく取り上げられていました。
当時は学業と演奏会、コンクールの準備で非常に忙しかったのです。
コンクールのためポーランドへ出発する数日前にも、コンクールでは演奏しないコンチェルト(協奏曲)の本番があり、ありがたいことではあったのですが、当時の私にはどうすればいいか分からない状況でした。
コンクールの曲も満足に弾けておらず、先生方からも「無理して行かなくてもいい」「コンクールを辞めたらどうか」とまで言われるほどでした。

―― 先生たちの言葉は、まだ若いから今後もチャンスはあるという、親心からだったんでしょうね。
はい。ポーランドに発つ日まで「頑張らなくてもいいよ」と送り出されました。私は日本での学校生活もあるし、一次予選で落ちてもいいからバカンス気分で行ってこようと思っていました。しかし、信じられないことに優勝してしまい、翌日からツアーが始まりました。自分勝手に生きてきた私にとって、コンクールで優勝することがどういうことなのか、正直全く考えたことがありませんでした。

―― 特にヴィエニアフスキ国際ヴァイオリンコンクールは長い歴史があり、これまで素晴らしい方々が入賞されています。
まさに歴史上のヴァイオリニストたちが受賞してきた、由緒あるコンクールですよね。
ヴィエニアフスキ国際ヴァイオリンコンクールで 1 位になったにもかかわらず、その重みを全く感じておらず、覚悟もしていませんでした。本当に申し訳ないのですが、何も考えていなかったのです。
その後、翌日からツアーが始まり、2023 年末まで 1 年以上にわたり様々な場所で演奏させていただきました。これは私の人生で起こるとは思ってもいなかった出来事であり、非常に貴重な経験をたくさんさせていただきました。しかし、「私」の演奏を聴

きにくるお客様よりも「ヴィエニアフスキ国際ヴァイオリンコンクールで１位になった人間」の演奏を聴きにいくという目的でお越しになるお客様の方が圧倒的に多かったのです。そのため、毎回プレッシャーを感じながら演奏することになり、また、私はそれほどキャパシティが大きい人間ではないので、演奏会が終わるとすぐに次の演奏会があり、多くの曲やコンチェルトをこなさなければならない状況に、息切れを感じていました。
昨年(2024 年)は活動を休止するなど、様々なことがありましたが、その中で、私は「もう自分のスタイルで進むしかないのだ」と考えるようになりました。
音楽家には様々なタイプの方がいらっしゃると思います。音を追求する職人気質の方もいれば、マルチに活躍する方もいらっしゃいます。音楽にすべてを捧げ、職人のように音楽を創り出す方々は本当に尊敬しますし、素晴らしいと思います。そのような人間になれたらどんなに良いだろうと思うこともありますが、私は「もう無理だ！」と吹っ切って、自分の人生を音楽にして表現する生き方の方が合っているのだと気づきました。
その時、「もう好きなようにやろう！」と思いました。

―― なるほど、ご自身の生き様を音楽にぶつけるというアプローチが、前田さんには合っていると気づいたのですね。年齢を考えれば、それに気づいたのは十分早いですよね。
大学２年生のときに、たまたま国際的なトップクラスのコンクールで優勝したがために、音楽との向き合い方を深く考える必要に迫られたのですね。
そのような苦しい時期を経て生まれた音楽が、聴く私たちを自由にしてくれることに感謝しています。先ほどお話ししたチャイコフスキーの協奏曲を聴いたときも、「こんなに自由でいいんだ！」と感じ、私たちももっと自由に生きようと思わせていただきました。
前田さんの音楽や演奏の魅力は、まさにそこにあると改めて感じています。今回のコンサートも、多くの方に聴いていただきたいです。

今回のプログラムはフランス音楽がテーマですが、そもそも前田さんが楽曲を演奏する際、作曲家が書いた曲にどのようにアプローチし、共感し、何か伝えるものを見つけるのでしょうか？
私はヴァイオリンを演奏しているため、通常は共演者がいる楽器だと考えています。もちろん、無伴奏の曲も存在しますが、多くの場合、ピアノ奏者、室内楽、あるいはオーケストラといった方々と共に演奏します。
そこで「ソロの楽譜だけを見ていても何も始まらない」という事実が正直あります。

―― 自分のパート譜だけを見て演奏することが多いですが、練習の時もそれだけでは何も分かりませんよね。
何も分からないので、私はソロの楽譜を読む前に全体の楽譜を見る事が多く、調号※にないシャープやフラット、ナチュラルが付いている箇所に注目します。ピアノとヴァイオリンの動きが異なっている部分など、視覚的に何か特別な意味があると感じる箇所は、楽譜の形に必ず現れていると思っています。

音楽の作り方、表現のつけ方の手段として曲の物語を作り上げる人もいるでしょうし、私も以前はそうしていましたし、今でもそうすることがあります。しかし、最近は「なぜ自分はこの和音に魅力を感じるのか」「なぜここをお客様に聴いてほしいと思うのか」といった理由に焦点を当てています。

単に和声(ハーモニー)や雰囲気から物語を想像するだけでなく、なぜこの音型がこのように展開してきたのか、その結果どうなったのかというように、一歩踏み込んで謎解きのように楽譜を読み解くのが、今はとても楽しいです。

―― ある意味で名探偵になったかのように、なぜここがポイントなのかを掘り下げていくのは、やはり面白いですね。
はい。面白いです。

―― 私は作曲と音楽学を専門としていますが、その視点から見ても、前田さんのお話には非常に納得できます。
クラシック以外のジャンルでは、演奏によって曲が作られ、それが楽譜として書き残されることが多いのに対し、クラシック音楽において多くの場合は、作曲家が楽器を弾かずに五線譜上で音楽を組み立てていきます。そのため、楽譜に残されたものは、まさに思考のプロセスであると言えます。
前田さんがおっしゃるように、作曲家が音楽を組み立てる際の思考プロセスを、図形や変化をつけた部分を糸口として紐解かれているのだと、今のお話から強く感じました。
本当に、そんな感じがします。うまく言い表せないのですが。

―― 例えば音楽には標題音楽と呼ばれる、物語を描写するようなものがあり、それは物語を想像しやすいと思います。しかし、今回演奏するソナタなどは必ずしもそういったものがないため、そのようなアプローチをすることで、何か発見があったりするわけです。
アプローチの変化によって、ご自身の中で何か変わったことはありますか？

※ 調号：ト音記号やヘ音記号のすぐ右隣にまとまってついているシャープやフラット

「人生を音楽に捧げるというよりは、人生を切り売りして音楽をする」という考え方が楽譜の読み取り方にも表れているように感じています。楽譜から何を感じるかによって、自分自身を知っていくという点が非常に面白いと感じています。だからこそ、今回演奏するドビュッシー、サン＝サーンス、フランクの曲は、10 年後に演奏したら間違いなく変わるでしょうし、10 年後に楽譜を見たときに、全く違う感じ方をするかもしれません。
作曲家がシステムとして構築した図形としての譜面と、私や共演者など日々変化していく私たちが、楽譜に映し出す自分の心情がどんどん変わっていくのが非常に面白いです。だからこそ、ずっと音楽を続けていても飽きないのだと思います。

―― リスナーの方々も、長年にわたりアーティストや演奏家を追いかけている方が多いのではないでしょうか。そうしたところを聴けるのが、クラシック音楽ならではの魅力だと私も思います。

先ほど共演者のお話が出ましたが、最近では巨匠と呼ばれる方々との共演機会が増えているように感じます。例えば今年(2025 年)だけでも、チョン・ミョンフンやミハイル・プレトニョフといった、誰もがその名を聞くだけで心が躍るような、まさに「生きる神々」ともいえる方々と共演されました。彼らとの共演で、何か驚きや刺激はありましたか？
巨匠になればなるほど何も語らなくなると、様々な方を見て感じます。例えば、チョン・ミョンフンさんやプレトニョフさんとのリハーサルで交わした言葉は、本当に一言二言だったと思います。しかし、すべてを達観した眼差しや、「何でも自由にどうぞ」「何でも受け入れますから」という姿勢は、人間としてどのタイミングでそうなっていくのだろうと思いながら共演していました。

―― もちろん当然のことながら、前田さんがご自身の音楽を自由に演奏され、他のオーケストラが別の音楽を演奏するわけではない中で、自然と一体となっていくわけですよね。それはやはり、リハーサルを繰り返す中で少しずつ変化していくものなのでしょうか。
リハーサル中はもちろんのこと、本番でも音楽は常に変化し続けます。やはり音楽は一期一会なので、それぞれ 3 回ずつ本番をさせていただいたチョン•ミョンフンさんやプレトニョフさんのときも、毎日毎秒、変わっていくものと思いました。どんどん自由にさせてくださった共演者の方々だったと思います。

―― 逆に相手から刺激を受けて自分が変化することはありますか？
あります。私の場合、日々触れ合うあらゆるものから刺激を受けて変化していきます。それは巨匠と呼ばれる方々はもちろん、学校の友人たちの演奏、練習室から聞こえる一つの音、今日の天気など、何がどうとは一概には言えませんが、音楽に限らず、色々な方と出会い、話し、触れ合う中で受ける刺激は非常に大きいと感じています。

―― ところで、オーケストラとの共演とは異なり、少人数の室内楽やデュオの場合、アプローチは変わってくるのでしょうか？
私はかなり頑固な性格なので、一度こうだと思ったら、なかなか意見を変えることができません。もちろん、日によって気分が変われば考えも変わることはありますが、基本的な部分は変えられません。

オーケストラとの共演では、ソリストがしっかりと音楽を作り上げておくことが不可欠です。私自身も、リハーサルに入る前に完全に音楽を作り、リハーサルでは微調整を行うようにしています。

一方、室内楽の場合は、まず楽譜通りに演奏できるように準備し、音楽的な解釈はリハーサルを通してメンバーと協力しながら作り上げていくことが多いです。個人的な見解ですが、この方が他のメンバーの意見を柔軟に取り入れられると感じています。室内楽では、演奏技術的な準備を終えたら、どこで入るか、他のメンバーが何をするかといったアンサンブルの要素を学び、それ以上のことはあまり深く考えないようにしています。

―― そうでなければ、どうしても頑固になってしまい、譲れない部分が出てきてしまう。そうなると、自分の演奏に合わせてもらうことになってしまいます。むしろ室内楽でやりたいのは、一緒に音楽を作りたいということですね。そうやって音楽を作り上げていく、あるいはそのようなアプローチに変わっていったのは、どこかで意識を変えたわけですよね。
そうですね。自分でかなり作り込んでいくタイプでした。もちろん優秀な方々と演奏させていただいているので、人間的にも素晴らしい方が多く、「いいね」と言ってくださるのですが、私自身は相手の意見を受け入れたいのに、自分の考えに固執してしまうことがあり、そんな自分が好きではないと感じていました。そのため、今ではわりと緩めの状態で臨み、後でしっかりと固める、というスタイルになりましたね。

―― ご自身の人生を切り売りしていると先ほどおっしゃっていましたが、それほど自分と分かちがたいものを基に音楽活動をされていると、変えたいと思っても変えられ

ないものになってしまいますよね。しかし、室内楽はそうではないと考えて活動されているというのは、非常に興味深いと感じました。
ではそろそろですね、今度としま区民センターでのコンサートで演奏されるフランス音楽のプログラムについて、是非お聞きしたいんですけれども、曲目はご自身で選ばれたのでしょうか?
はい、フランクを弾きたかったので、自分で選びました。まずフランクが主軸にありました。

―― フランク、結構今まで色々なところで演奏されてる印象もありますけど、実際はどうなのでしょうか？
私の記憶では、関東での演奏は数回あったかもしれませんが、ヴィエニアフスキ国際ヴァイオリンコンクールでの優勝以降はありませんでした。
そろそろ関東でも、フランクを弾きたいと思い、フランクを主軸にフランス系のものをたくさん弾きたいなと思って、サン＝サーンスとドビュッシーを順番に入れました。

―― この 3 人はフランスで、世代は多少異なるとはいえ、同時代を生きた音楽家と言えるでしょう。しかし、彼らの音楽のタイプは違いますよね。
フランス音楽全体のイメージ、そしてこの 3 人のそれぞれの個性について、前田さんはどのように捉えていらっしゃいますか？
フランス音楽には、かつてはフワッとした印象派的なイメージを抱いていました。
しかし、個々の作曲家に目を向けると、異なる一面が見えてきます。

特にドビュッシーのソナタに関しては、自然の摂理を強く感じます。彼の晩年の作品であるこのソナタには、物が落下する重力の動きのみを表現したような部分があり、そこにドビュッシー独自の視点があると感じています。まるで同じ風景を異なる画家が描き、それぞれに個性が表れる絵画のように、ドビュッシーは人間が関与しない気温や重力といった自然現象を、彼なりの視点で音楽に昇華させているように感じます。特に第 2 楽章では、重力のわずかにたゆんだ部分が表現されており、その点が非常に興味深く、演奏するのが楽しみだと感じています。

―― それこそドビュッシーというと、一般的には印象主義という感じのイメージですね。すべての作品がそういうわけではありませんが、まさに美術の印象派のように、ある瞬間を良い意味でデフォルメして描いたようなイメージがあります。
それに対して晩年の作品は、古典的なものに戻ってきたと一般的に言われますが、前田さんの視点からすると、自然や自然原理を感じるという点は、印象派的なものを突

き詰めた結果にも見えるわけですよね。
だからそのような視点で捉えると、他の人の演奏とは全く違うドビュッシーが聴こえてきそうですね。
サン＝サーンスの音楽については、人によって意見が分かれると思いますが、私には音楽というよりも音響効果の実験のような、つまり「音が人間に与える影響とは何か」を探求しているように感じられます。楽譜はまるで実験の記録のようで、「メロディーがあっただろうか」と疑問に思うほどです。
もちろん、ドビュッシーよりも聴きやすいと思いますし、メロディーらしい部分もあるとは思います。しかし、どうしても音の重なりがどのような効果を生むかを理屈っぽく追求しているように聴こえてしまうのです。その点が非常に面白いです。
例えば第 2 楽章の中で 2 小節ぐらい、ラヴェルのボレロに出てくる音を重ねて音響効果を出す部分のようにも聴こえる箇所が登場するところとか。

―― ボレロには、有名な 3 つの異なる調が重なり、どこか神秘的な音響が響く夢のような場面がありますね。
もちろんそこまで明確ではないのですが、そのような音の重なりを感じたり、あるいは非常に切迫感のある音を並べることで、人間がどう感じるかという実験的な要素が強く感じられるなって思ったりして…。
例えばヴァイオリン協奏曲第 3 番の第 2 楽章の最後のアルペジオ(分散和音)で、パッパッパッパッ……とだけ演奏される部分とか。

―― そうですね。
正直、綺麗だけどアルペジオをこれほど続けて「何だろう？」と感じる部分がありました。サン＝サーンスのヴァイオリン・ソナタ第 1 番を改めて見てみて、その思いはさらに強くなりました。

―― 確かに、サン＝サーンスといえば、初期にはフランス音楽にリストやワーグナーの影響をもたらした、あるいは有名な「死の舞踏」のような交響詩を書いたというイメージがあります。しかし、実際には、人体実験ならぬ「ヴァイオリニストはどこまでできるのか」「聴衆はどう感じるのか」といった、ある種の試みを行っていたという視点は興味深いものです。確かに、サン＝サーンスは一筋縄ではいかない作曲家ですよね。
鍵盤楽器奏者が作った曲にはよくあることですが、ヴァイオリンで弾くには指が一本足りないと感じることが多々あります。特に第 2 楽章の後半部分は「コンチェルトですか？」と思うほどヴァイオリンもピアノも非常に難しく、合わせるのも一苦労で

す。とりあえず練習しなければならないと思うのですが、「あと一本指があればもっと簡単に弾けるのに」と感じています。常に少しずつ指を別の弦に移動させながら弾かなければならないからです。

一番不親切なのは、第 2 楽章の後半部分はヴァイオリンの譜面がめくれないことです。6 ページほど繋がっているので、譜面をめくるところがありません。暗譜するか、非常に小さく印刷するか、印刷して繋ぎ合わせるか、どうにかしなければと考えています。本当に不親切です(笑)。

―― 一筋縄ではいかない音楽であることが、色々なところから伝わってきましたね。「指があと一本あれば」というのは、ピアノが片手 5 本の指で鍵盤を弾くのに対し、ヴァイオリンは親指を指板の支えに使うので、4 本の指で弦を押さえて演奏します。それなのに、なぜか 5 本指でないと弾けないようになっており、「ピアニストと弦楽器奏者は違うんだよ」という感じでメラメラしてしまうというところですよね。
ラシドレなら 4 本の指で弾けるのに、ラシドレミレドシだと少しずつ移弦していく必要があり結構大変です。

―― でもその分、ヴァイオリニストの作曲家だったら出てこないような音楽になっているとも言えるかもしれないですね。演奏される機会がないわけではないですが、他の 2 曲よりも聴ける機会が少ないかもしれないので、前田さんがどのようにこの作品の実験性をあぶり出すのか楽しみです。
そしてメインプログラムとなるフランク、これは本当に問答無用の名曲で色々な人が演奏しますが、前田さんにとってはこの曲はどんな曲ですか?
そうですね、やっぱりこの曲はヴァイオリニストにとっては、もう何て言うんですかね、永遠の憧れみたいな曲でもあると思いますし、どれだけ弾いても「やっぱりいいな」って思います。第 1 楽章、第 2 楽章、第 3 楽章、第 4 楽章があって、第 3 楽章がとっても暗く「登場人物の心情が結構辛めになっているかな」と思いますが、第 4 楽章が始まって、いきなり dur(長調)で「ふわぁ〜」となった時に、いつもここの部分を弾けて「私は幸せ」って思いますね。本当に何回弾いてもいい曲だなと思います。

―― あの曲は、大ヴァイオリニストだったイザイの結婚祝いに書かれた作品と言われていて、しかも最後のその第 4 楽章というのは、実はピアノとヴァイオリンがメロディーを追いかけるのがいわゆるカノンになっていて、本当に 2 人で演奏しているのが、ものすごく際立つような音楽ですよね。
本当に。あの曲は一本の映画を見たような気持ちになりますね。

―― 多分その大きな理由の一つはドラマチックであることに加えて、専門用語で言うと循環形式※と言って、第 1 楽章に出てきたあるメロディーが何回も姿を変えながら出てきます。この部分について前田さんはどのようなイメージを持って演奏しているのですか?

循環形式※の曲で他に私が思いつくのは、ブラームスのヴァイオリン・ソナタの第 1 番の最後、ちゃんとした循環形式とは言わないかもしれないけれど、色々なモチーフが第 3 楽章に出てくる部分があったり。そういう曲を弾いていると、人間は結局変わらないんだなと思わされます。変わらないけれど、色々なことがあって、色々な人に刺激を受けて、最後には死ぬわけです。

様々なことがあってよかったと言って終わっていけるというのを、耳からこのメロディーがここに出てきて、こういう形になっていって変わっていって、最後はこういう形に落ち着いて、ということを耳だけで感じられることはすごく贅沢なことだと私は思います。

だからとっても楽しいですよね。

―― そうですね。同じメロディーが何回も出てくるからこそ、より人生であったり何か物語のように捉えて自由に聴くことができるというのは魅力ですね。

いわゆる小品と呼ばれるものだったら歌みたいな感覚で楽しめるけれども、全部ソナタで、しかも複数の曲から、場合によってはサン＝サーンスなど一つの中に複数の要素があったり、一つの曲がすでにアルバムのようになっていたりするような作品です。そういったものを演奏する時には少し意識は変わりますか？

そうですね。ソナタは、今回は私のリサイタルとして演奏させていただきますけれど、基本的に本当にピアノがメイン。ピアニスト with ヴァイオリンぐらいの重さかなとは思います。

―― 実際、「ヴァイオリン・ソナタ」と俗に呼んでいるタイトルで、正式なタイトルを楽譜で見ると「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ」と書いてあることが非常に多いです。

「ピアノ・ソナタ ヴァイオリン付き」とかもあります。

小品みたいなものとは違って、まずヴァイオリンと今回だったらピアノとの掛け合い、ピアノが全面に出る部分、ヴァイオリンが全面に出る部分、そういうことを楽しんでいただけることもすごく魅力だと思います。

※ 循環形式：多楽章の曲で、同じ主題や旋律が複数楽章に現れ、全体に統一を与える形式

例えばクライスラーの小品や、サラサーテのヴィルトゥオーゾピース※などとは違って、色々な複数の楽章で構成されているものに関しては、長いからこそいい魅力もあると私は思います。演奏会が始まったときに「この演奏家はこんな感じなのか」とか、「この曲ってこんな曲なのか」と自分が最初に思う。それが、フランクだったら30分かかりますが、30分後に自分がどうなっているかは、その演奏が始まった時には全然わかっていないわけです。そのなかで、その日のホールだったり、演奏家だったり、横にいるお客さんだったり、そういう色々な要素が混ざって自分がどんどん変わっていって、演奏が終わった30分後に「私はこう感じた」と演奏を聴きながら自分自身を観察していけることがすごく面白いと思います。
だからフランクだったら第4楽章、サン＝サーンスだったら第2楽章で、どんどんどんどん色々な物語というか曲が展開していって、それに対して自分自身はどう感じていって、最後には何を思うのか、それを観察できることはすごく面白いことだと感じます。

―― しかもそれは当然演奏している側にとっても毎回変わっていくわけですものね。自分たちも最終的にどこにたどり着くかは完全にはわかっていないのです。それは共演者次第で変わっていくと。
なので、是非今回の共演者の方のお名前そして魅力もご紹介いただけますか。
はい、今回はピアノを諸田由里子さんに弾いていただきます。諸田由里子さんって呼ぶのに私はすごい違和感があり、高校の時から「諸田先生、諸田先生」とずっと呼んでいて、「東京の母」と言ってちょっと怒られたりしています(笑)。

―― お姉ちゃんぐらいにしておきましょうか。
「姉ですよ！」みたいなことはいつも言われいて、東京では本当に保護者のようにお世話になっていて、公私ともにたくさん共演させていただき、たくさん一緒にご飯を食べているし、ずっとお世話になっている先生です。特にフランスプログラムにマッチする、すごく繊細で麗しいピアノを弾いてくださる先生なので、その点もすごく楽しみにしていただけたらなと思います。フランスプログラムを決めるのと同時ぐらいに、フランスプログラムにするなら諸田先生に弾いていただきたいと思ってお願いしたので、今から一緒にリハーサルできることが本当に楽しみです。

―― 本番の前のリハーサルから楽しみなんですね。きっと、共演して幸せっていうエネルギーがもう最初から出るんじゃないかと楽しみにしてます。先生とは、いつ頃から共演していたのですか?

※ ヴィルトゥオーゾピース：演奏家の高度な技巧を駆使して演奏される、超絶技巧的な楽曲

確か私が高校 1 年生の冬ぐらいからお世話になっているんじゃないかと思います。

―― もうだいぶ長いですね。
もうとっても。私が 16 歳の時からです。

―― 前田さんが通われていた付属高校(東京音楽大学付属高校）は、当時、場所はどこでしたか?
1 年生、2 年生の時は護国寺で、3 年生になって池袋になりました。

―― もともとキャンパスが今も池袋にもありますし、今回の演奏会もそちらの方なので、是非池袋の思い出、東京音大の思い出などあれば、最後に聞かせていただきたいです。私自身も年はだいぶ上ですが、付属高校そして大学の卒業生なので、母校の後輩先輩という感じです。是非池袋、東京音大の思い出があれば教えてください。
私は出身が大阪で、高校 1 年生から大学 2 年生の夏くらいまで大学の寮に住んでいました。まず池袋に来た時は、「なにここ！うわぁ、いっぱい人がいるし、いっぱいお店がある！」と思いました。サンシャイン通りなどに行くと見たことのないような世界が広がっていて。寮生の子たちは地方から来ているので、みんなで「ちょっと行ってみる？サンシャイン通りとか行ってみる？」みたいな…。行ってみて「うわぁ怖い」って帰ったりしたことがありました。ずっと池袋にいたので、逆に今はもうその印象がないです。

―― ホームグラウンド、庭というか。
駅を出たところはすごく「バーッ！」となっていますけれど、ちょっと入ったら結構穏やかな部分もあって、私は結構そこが好きで。大学の近くにメロンパン屋さんがあって、そこでメロンパンを買って食べたりして、結構楽しかったですね。

―― 雑司が谷の方に入るとだいぶ雰囲気が変わりますよね。おいしいメロンパン屋さん、私もよく買いました。 あそこだとすぐ分かりました。そういうものを買って持ち帰って、ちょっとテラスを眺めて、また練習するのが大学だったわけですね。大学はもちろん今も関わっていらっしゃると思いますけど、特に大学の学部生、さっきコンクールの話もありましたけれど、そこでの出会いや、何かここが大事だったということはありますか?
すべて大事ですね。本当に高校から無駄な授業が一つもなかった気がします。もちろん無駄なことは一つもないと思いますが、本当に全部が即戦力で身になってくれるものでした。まずうちの高校はコードネームから始まるんです。

和声を学ぶ前に、高校１年生の春学期はコードネームを全部やって、そこからやっと和声に入る、そういうのは珍しいらしいです。

―― 他のところはいわゆる芸大和声から入っていくことが多いですからね。
今、私はコードネームをすごく使うし、やっぱり私からすると和声よりも分かりやすい部分です。

―― 一発で何の構成音なのかというのが分かりますからね。
すごく面白くて。音楽史とかもすごく面白かったです。
私が特に高校で一番心に残っている言葉があって。コールユーブンゲン※を歌う授業での時間に「人間って本当にヤバくなると長調になるんだよ！」と言われて。
ハッピーでポジティブな気持ちの時は長調で歌って、悲しいとか辛いとかなってくると短調にいく。それは単純明快。「そうだろうな」と思いますが、本当に何もかもがどうでもよくなった時、人間は長調で歌うんだと言われたのがすごく私の心に残っています。
最近も色々な曲を聴いていて、この長調はもしかしたらそのヤバい方の長調かもしれないと思ったり…。
高校・大学の授業、友達との触れ合い、寮生活、すべてにおいて刺激がたくさんあって、すごく面白い学生時代だったと思いますね。

―― すべてをここで学んだということが今の話から伝わってきました。
自分が聴衆側になった時にどんな演奏に惹かれるかというのを教えてください。
私は巧（たくみ）と書いて「うまい」ほうの演奏にやはり惹かれることが多くて。少しだけ知ってしまっているからこそ「あ、ここはそうするんだ」とか、「そういう解釈なんだ」とか聴きながらアナリーゼ※したりしてしまうことが多いです。「こうもっていって、こうしたんだな」みたいな凄いこだわりを感じるとワクワクしますね。

―― お客さんも聴いているということは、実は一緒に音楽しているんだということですね。
コンクールの優勝後に色々な国をツアーで訪れたと思いますが、特に印象に残っている国や風景、食事などはありますか。
風景に関しては、ドイツのコンスタンツとかは本当に美しかったです。

※ コールユーブンゲン：ドイツの音楽家フランツ・ヴュルナー氏によってまとめられた声楽の練習教本のこと
※ アナリーゼ：音楽作品を構成する要素や構造を分析すること

食事に関しては、私はマクドナルドが好きで、色々な国のマクドナルドをすごく食べ歩いたんです。

―― 結構、味は違うんですか。
全然味は違います。同じメニューであっても違います。

―― ビッグマックといっても国によって全然違うんですね。
国によって違うし、例えば日本にサムライマックがあるように、色々な国で色々なその国のラインがあって、そういうのも面白い。
韓国は全部にカロリー表示がついていて、すごい面白かったですよ。

―― 最近自炊をはじめたようですが?
ちょっとしてみようかなと思って自炊していて、最近は卵焼きを毎朝作るのにハマっています。
というのも友達に「上手にできた！」と思って見せたら、「ケーキ？」と言われて、その後、絶対に真っ黄色に作れるまでやめないと思っていたらハマっちゃって。今は上手に作れるようになりました。

―― やっぱりちょっと凝り性なんですね。
そうかもしれないですね。

―― では最後に、このコンサートに行こうかなと迷ってらっしゃるお客様にメッセージをいただけますでしょうか。
はい。私は「この曲をこう聴いてほしい」というようなことはあまり言いたくないです。「私が演奏するもの」そして「その日の気温とか食べてきたもの」とかで全てが変わっていくので。
また１時間半ぐらいの演奏会の中で、すごく色々なスタイルの曲が集まっているので、「自分は今どういう気持ちだろう」というのを色々な視点から感じられる機会になるかなと…。
一緒に音楽をしに来てほしいなと思います。

【公演情報】
フレッシュ名曲コンサート(室内楽)　前田妃奈 ヴァイオリン・リサイタル
2025 年 10 月 5 日（日）15:00 開演（14:30 開場）
としま区民センター　８F　多目的ホール